

“楽しむ姿勢” “前向きに取り組む姿勢”

私は、作家であり、自閉症者である東田直樹さんのファンだ。

彼の発言、文章、あるいは存在そのものが、多くの驚きや共感、そして人権や障害に対する新たな視点や学びを与えてくれる。

彼の著書「自閉症の僕が跳びはねる理由」の中に、次のような言葉がある。

「側にいてくれる人は、どうか僕たちのことで悩まないで下さい。自分の存在そのものを否定されているようで、生きる気力が無くなってしまうからです。僕たちが一番辛いのは、自分のせいで悲しんでいる人がいることです。自分が辛いのは我慢できます。しかし、自分がいることで周りを不幸にしていることには、僕たちは耐えられないのです。」

皆さんは、この言葉を読んで、どんなことを考えますか？

私たちは、障害のある子どもや支援を必要としている子どもと関わる時（学校や療育の場、大学の臨床活動や実習など）に、あるいはこれから関わる際に、どうすれば相手が幸せになるのか、どうすればより良い環境になるのかと、考えを巡らすことはきっとあるが、それが苦悩であつたらいけないのかもしれない。

支援を受ける側も行う側も、楽しめるように、前向きになれるような思考の変換が必要なのではないか。

- ・なぜできないの!? → どうしたらできるようになるかな
- ・なんでこんなに大変なの!? → どうしたらもっと一緒に楽しめるかな
- ・全然できていない! → できていることは何だろう etc...

本来、障害の有無に関わらず、目の前の子どもがより成長したり、幸せになったりするための支援や環境調整を考えることは、ワクワクし、温かい気持ちになることのはずである。それにも関わらず、苦悩になってしまう時は、本来のねらいを見失い、そこに何か良くない要因が潜んでいるのでは!? 例えば「自分の考え方」（相手の人権を尊重できているかな、障害の特性を正しく捉えられているかな）、「環境」（相手にとって過ごしやすい、能力を発揮しやすい環境になっているかな）、「周囲の人々」（子どもに関わる周囲の人たちはどう捉えているのかな、連携を図れているのかな）等々。

子ども達への支援を考える際は、私たちも子ども達も、元気になり、前向きになれるような姿勢でいたいですね。思い悩んだ時には、一度立ち止まり、本来の思いや自分を見つめ直してみてもいいのでは!?

【引用文献】

東田直樹「自閉症の僕が跳びはねる理由」、エスコアール出版、2007